

19世紀ヨーロッパと国民国家

今回学ぶこと

ナポレオンの支配は、『ナポレオン法典』などを通じて人々に近代的な市民社会の意識を浸透させると同時にフランスの支配への抵抗も引き起こし、ヨーロッパ各地で国民意識を目覚めさせることとなった。19世紀前半のヨーロッパは自由主義とナショナリズムの精神の深まりの時代となった。1848年の諸革命は民衆による下からの運動の頂点となったが、以降、運動は挫折し、むしろ政府主導で上から国民国家の構築が進められるようになった。今回は、19世紀にヨーロッパでどのようにして国民国家が造られ、それが国家による統治をどのように変えたかを学ぶ。

調べておこう・覚えておこう

- イタリアの統一とドイツの統一の過程を比べてみよう
- 日本に全国共通の学校制度をつくるのが決められたのはいつか調べてみよう。
- ロマン主義の芸術作品（文学、絵画、音楽など）にどのようなものがあるか調べてみよう。

1848年革命 ～19世紀の転換点～

ナポレオンの支配はヨーロッパに自由主義と国民意識の種をまいた。19世紀にはヨーロッパの各地で、イギリスやフランスのように産業革命で先行した大国に対抗するため、強力な国家の構築を目指す動きが生じた。その際、特権階級だけが国家を造るのではなく、国民全体が国家を支える国民国家が理念として掲げられた。国民主義（ナショナリズム）の動きである。

ウィーン体制下の1829年にギリシアがオスマン帝国から独立を勝ち取ると、これがヨーロッパ各地の自由主義と国民主義に火をつけ、翌年1830年にはフランスで七月革命が起こった。七月革命はベルギーの独立を促したほか、ポーランド、ドイツ、イタリアにも波及した。こうした運動は労働者や中下層のブルジョワジーを担い手としてさらに高揚し、1848年にはパリで二月革命、続いてウィーンとベルリンで三月革命を引き起こした。これを機にドイツでは各地の自由主義運動の代表が集まってフランクフルト国民議会が開かれ、ドイツの統一と憲法制定が議論さ

れた。その後、工業地帯であるラインラントを擁し、1834年のドイツ関税同盟の成立を導いて経済的な統一で先行していたプロイセンがビスマルク首相のもとでドイツ統一の主導権を握るようになり、1866年のプロイセン・オーストリア戦争（普墺戦争）でオーストリアを破ると、翌年には北ドイツ連邦を成立させた。南ドイツの諸邦はプロイセン主導の統一に抵抗感をもっており、自国の隣に強国が出現することを恐れたフランスのナポレオン三世も南ドイツの反プロイセン感情をあおっていた。しかし1870年ビスマルクがフランスを挑発してプロイセン・フランス戦争（普仏戦争）を起こすと、南ドイツの諸邦ではナショナリズムが高揚してプロイセン中心のドイツに結束し、1871年、戦争はドイツの勝利に終わった。プロイセン国王ヴィルヘルム一世は進軍したパリのヴェルサイユ宮殿でドイツ皇帝に即位し、ここに統一ドイツ国家であるドイツ帝国が成立した。

つくられる「国民」

ドイツ統一は、それまで何世紀にもわたって別々の領邦国家に属していた人々をひとつの国民とすることを必要とした。そのため統一ドイツ国家は、ドイツ民族の共通性を「発見」ないしは「創造」する必要があった。グリム童話で知られるグリム兄弟は、ともに言語学者であり、ドイツ語辞典の編纂事業など、国民が共通して話すドイツ語の標準化に貢献した。彼らがドイツ各地の民話を収集して編んだグリム童話も、ドイツ民族の文化的共通性を示すものとして編纂されたものである。こうした事業はドイツのナショナリズムの高まりにロマン主義の芸術運動が呼応した結果でもある。

統治者の変容

ビスマルクの国内統治政策はしばしば「アメとムチ」と表現される。一方で社会主義者鎮圧法の制定により、労働者の反政府運動を厳しく弾圧しつつ、他方では各種の社会保険制度をととのえて、労働者の国家への帰属心を高めようとした。

こうした統治は、工業力と軍事力を競い合う時代において、国家が工場労働者や兵士として動員可能な多数の国民を必要とするようになったことに対応するものである。この意味では、言語の統一や国家による全国共通の学校制度の導入といった政策は、上記のような文化面・精神面での国民統合だけでなく、実際に工場や軍隊で国益に奉仕する国民をつくり出すという目的も持っていたのである。